

猫は知っていた

Niki Etsuko

仁木悦子

江戸川乱歩賞全集 2

日本

多岐川恭

Takigawa Kyō

濡れた心



えどがわらんぼしやうぜんしゅう
江戸川乱歩賞全集 ②

ねこ し ぬ 、 こころ
猫は知っていた 濡れた心

に きえつこ た きがわきよう にほんすいり さつ かきようかい へん
仁木悦子 多岐川恭 / 日本推理作家協会 編

© Yasushi Futsukaichi, Miyoko Matsuo,
edited by Nihon Suiri Sakka Kyokai 1998

1998年9月15日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——株式会社東京印書館

印刷——株式会社東京印書館

製本——和田製本工業株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-263876-2

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆

講談社文庫
猫は知っていた
江戶川乱歩賞全集②
濡れた心
章
藏

多岐川恭

日本推理作家協会 編

講談社

江戸川乱歩賞全集刊行のことば

一九五四年、江戸川乱歩が還暦記念に日本探偵作家クラブ（社団法人日本推理作家協会の前身）に寄付した百万円を基金として、創設されたのが江戸川乱歩賞である。

当初、当該年度にミステリー界で顕著な業績を示した人物・団体に贈る趣旨で、たまたま第二回までは創作以外の業績に贈賞された。第三回からは方針を改め、毎年、既成・新人作家を問わず書下し推理長篇を公募して、その最優秀作に授賞し、講談社より出版する現在の形態が確立された。

推理界への長篇登竜門として、長らく唯一無二の存在だったが、類似の賞が各出版社等によって設けられた現今でも、依然ひととき高い評価を得ていると言っても、自画自賛にはならないだろう。歴代の受賞作は、いずれも俊秀のデビュー作あるいは出世作となった長篇で、これらを通覧することは、そのまま日本推理小説史の重要な一側面を窺うことにほかない。

この類のない集積を、恒久的に、また手軽に読者の書架に供するために、本全集は企画された。資料面にも充分な配慮を心がけている。大方のご支援を請う。

目次

猫は知っていた

仁木悦子

9

第三回江戸川乱歩賞選評

284

濡れた心

多岐川 恭

291

第四回江戸川乱歩賞選評

551

解説

中島河太郎

564

卷末エッセイ「思い出と寂しさ」と

宮部みゆき

574

猫は知っていた

作者の言葉

仁木悦子

表の写真でごらんとおり、私は、寢床に横になっている人間です。この本も、全部床の中で書きました。

しかし、ほんとうの仁木悦子嬢は、病人ではありません。病氣などとは縁もゆかりもない、まるまると太った元気な女学生です。どうか読者の皆さんは、表の写真のことはこのへんで忘れてしまつて、陽気でおてんばな今ひとりの仁木悦子嬢と、お近づきになつてやつてください。そして、彼女の出会つた奇怪な事件のてんまつに、耳を傾けてくださるよう、同姓同名の私からもお願いいたします。

（『猫は知っていた』一九五七年十一月小社刊）

プロローグ

「もう一ぺん地図を見せてごらんよ。悦子^{えつこ}」

曲り角に立ちどまって、右と左を見くらべながら兄が言った。私はバッグの中から、くしやくしやになった紙きれを取り出した。

「わかりやすい道だと言ってたんだがなあ。牧村のやつ、地図かくのが、どうしてこうへたなんだろう」

ぼやきながら、手の甲でひたいの汗をこすり上げた、ちょうどその時だった。右の道に人の姿が現われた。淡青い清潔な開襟^{かいきん}シャツに、皮の折りかばんをかかえた若い男だ。兄は、その男の近づくのを待って声をかけた。

「ちよっとお尋^{たず}ねしますが、この辺に、箱崎^{はこがき}医院と言う外科病院はないでしょうか」

青年は、きれいな一重まぶたの目で、警戒するように私たちを見つめた。が、やがて落ちついた口調で言った。

「僕のうちです」

これは思いがけなかった。兄は、助かったというように目玉をくるりと回した。

「そうでしたか。僕は仁木雄太郎（にきゆうたろう）といひます。お聞きになつていないかもしれませんが――」

「ああ、仁木さん」

と、青年は思いあつたふうでうなずいた。

「うちの幸子（さちこ）にピアノを教えてくださるかたですね。そちらが妹さんですか？」

どうやらこの青年は私たちのことを、すっかり聞いているらしい。兄の雄太郎と私は、これまで借りていた部屋を追い出され、兄の友人の世話で箱崎という医院の二階を借りることになつて、きよう初めて訪ねて行くところだった。なんでも箱崎家には、医科大学に行つてゐるふたりの息子と、まだ幼稚園の小さい女の子があるそうで、私がその女の子にピアノを教えて、その代わり間代を半分にしてもらふということに、友だちが大体の話を決めてくれたのだ。してみると、今日の前に立つてゐる青年は、英一（えいいち）さんという長男か、それとも次男――たしか敬二（けいじ）さんとかいつた――のどちらかに違ひない。青白い顔と、注意深い目をした、やせ型の引きしまつたタイプで、年は二十一か二ぐらい、頭はいいが、氣さくにつきあえる相手ではなさそうだ。だが、ともかく私たちは彼のあとについて歩きだした。彼は、あれつきり一言も言わずに身軽に足を運ぶ。こういう體質の人は、見かけがきやしやなわり

に、しんが強く、力も案外あるものだということを私は知っていた。

箱崎医院は、私たちが地図を眺めてうろうろしていた地点から百メートルとは離れていなかった。氷屋の角を曲り、公衆電話とラジオ屋の前を通りすぎ、散歩中の犬が片足あげて用を足しそうな電信柱の角を、もう一度曲つてすぐ——というよりも、つまりその角の家がそれだったのだ。このへんは戦災で焼けなかったとみえて大きな古びた家が多い中にも、この医院は、ずいぶんと時代がかった、どっしりした木造の二階建てで、門から玄関まで五、六メートルの距離に、白っぽいきれいなじやりが敷いてある。正面の二階建てとは別棟になつて、同じような古びた建物がもう一つ、右手の方にくつついていたが、この方は平屋だった。

「左の方が病院で、うちの者はこっちに住んでいます。はなれと呼んでいるんですが」

右手の平屋を指さして大学生が説明した時、門の前で自動車の止まる音がした。私は何気なくふり返った。車をおりて来たのは、夫婦らしいふたり連れだった。男の方は四十に近く、かた幅の広い、たくましい体格をしていた。目も口もなみはずれて大きく、鼻は肉が厚く、まゆ毛は墨でぐいと引いたように濃いのだが、それらの偉大なぞうさくが、それぞれうまいぐあいに納まつて、一種独特な印象を与える精力的な顔を作りあげていた。欲しいと思つた物は何年かかつても手に入れずにはおかないといったねばり強さと、或種の冷酷な聡明さが、おうへいな目の中に同居していた。一方、奥さんらしい方はいえ、これまた、ど

ここらどこまで夫とは正反対だった。小柄で、目も口もこまこまと、性質も内気そうに見える。うすいグリーンのシックなツーピースに身を包み、手にはぜいたくな金具を打ったスーツケースをさげていた。もともとは楚々とした美しい人なのだろうにと、私は心中彼女に同情した。というわけは、整った可憐な顔立ちにもかかわらず、彼女の様子には、あまりに生氣がなく、うんざりした疲労の色がにじんでいたのだ。きっと、この奥さんは病気なのだ。

それで診察をしてもらいにお医者さんにやって来たのだ。スーツケースを下げているところをみると入院なのかもしれない。それにしても、病人に荷物を持たせて平然としているなんて——私は決してこんな夫は持たないわ。私が病気になったら、病院までかたぐるまに乘せてつてくれる人でなくっちゃ——そんなことを考えながら私は歩きだそうとした。と、私ははっとした。私たちを案内して来てくれた大学生の顔に、ただならない表情が現われていたのだ。目を大きく見開き、くちびるをきゅっと結んで彼は、例のふたりづれを見つめていた。心のうちを見せようとしないう心深い態度が消えてしまつて、心臓の動悸までがすけて見えるみたいだった。

御夫婦が病院の玄関に見えなくなつた時、彼は初めてわれに返つた。私が彼の顔を眺めているのに気づくと、彼は気の毒なほどぎまぎした。一瞬彼は、憎々しげなひとみで私をにらんだ。が、次の瞬間には、またさっきの冷静な目に戻っていた。

「こっちにも玄関がついてるんですね」

兄の雄太郎は何も気づかなかつたらしく、家を眺めて言った。右の方の、いわゆる「はなれ」にも、病院の玄関よりは小さい脇玄関があつて、その前に、赤い三輪車が、手持ちぶさたそうにしていた。

「そうです。僕等はいつもここから出はいりしています。——どうぞ」

大学生は玄関の戸を開けると、

「かあさん」

と声をかけた。

「英一かい？ お帰り」

と、出てきたのは、六十五、六と思われる、小太りの、世話好きそうな老婦人だった。

「おかあさんは幸子を連れて、そのへんまで買物に行きましたよ。お友だちなの？」

「いや。仁木さんですよ。すぐそこで会った」

大学生——当家の長男の英一さんと知れた——は、一言そう言つて紹介すると、これでお役目済みとばかり、私たちには目もくれず、さつさと廊下を奥へはいつて行つた。

「あれはどうもお愛想のない子で。まあどうぞ——。敏枝も、すぐに戻りますから」

老婦人は、客扱いに慣れた態度で、私たちを奥の間に案内した。

「仁木さんとおっしゃいましたかしら？ 牧村さんから、おうわさはうけたまわつております。妹さんは、音楽大学の師範科に行つていらつしやいますとかねえ。幸子のことは、よろ

しくお願いいたしますよ。申し遅れましたが、わたくし、幸子の祖母で桑田^{くまた}ちえと申します」

そう言われるまでもなく、私にはこの老婦人がだれであるか、およその見当はついていました。箱崎家には、主人夫妻と三人の子供のほか、夫人の母親に当る、まだ元気のいいおばあちゃんがいるということを耳にしていたからだ。だが、そういう私も、ちょうどその時、ふすまをあけてお茶を運んで来た十七、八の少女は、いったいだれなのか、首をかしげないわけには行かなかった。どこかの私立高校の制服らしい淡青色のセーラーを着た、ちよつとキツネに似た顔立ちの、やせた少女だった。女中とは思えないし……と私は、私自身とは一つ二つしか違わないらしい彼女の横顔を眺めて、心の中で考えていた。

「ああユリ。あんたも御あいさつするといいわ」

桑田老夫人は、私の疑問を読み取ったわけでもあるまいが、私たちの方に向き直って、「仁木さん。これは、やはりわたくしの孫で、桑田ユリと申します。英一たちから見れば、従妹^{いとこ}にあたるわけですけど、両親に死なれてから、こここの家の世話になっておりますので、まあこの娘も同じでございますわ。これでなかなかよく気がつきますし、優しいところもある子でしてねえ」

そう言う老夫人のことばの端には、何か取りなすような響きが感じられた。少女は、取りなすました硬い表情で、私たちの前にお茶を置くと、黙って部屋を出て行った。

「時に、お兄様の方は、何を御専攻ですの？ やはり学生さんとうかがいましたが」

「僕ですか？ 植物学です」

「そうでいらっしゃいますか。わたくしのせがれも、植物採集が好きでしたが、ひとり息子だものですから、家業の医者をつがせまして。あのユリの父親なのですけど、軍医で戦病死してしまいましたの。あれさえ生きてくれたら、わたくしも、よめ入った娘の世話になど、ならなくてすむのですが――。まあ今のところは、こここのむこの兼彦が、わたくしにもユリにもよくしてくれますけど、英一の代になりましたら、どうなりますか。――あら、帰ってまいりましたわ」

玄関のあく音と一しよに、「ただいまあ」と言う子供の声が、とび込んで来た。母らしい人の何か言うのも聞える。はしゃいでいた子供の声が、不意にぴったり止んだのは、私たちが来ていることを告げられたためだろう。ややあつて、

「いらっしゃいませ」

とはいって来た夫人は、桑田老夫人に似て、小太りの気のよさそうな人だった。そのうしろから、おかつぱ頭を出したりひっこめたりしているのは、私の新しい生徒に違いない。スカートのはつと開いた短いワンピースを着て、頭に大きなピンクのリボンをつけている。両親の愛情を一身に受けて大事にされている子供らしい、身ぎれいさだった。

あいさつがひとしきりすむと、敏枝夫人は幸子ちゃんを前に押しだして、「こんにちは」